

サンフランシスコのイエルバ・ブエナ・センター・フォー・ジ・アーツを会場に「何も関係はないが、何かを関連づけることはできる」と題する展覧会を企画、構成した際、田中功起にはビデオ作品『ひとりの髪を九人の美容師が切る（二度目の試み）』をふくむ新作シリーズの制作を依頼し、共に仕事をする機会を得た。一見したところ複雑さとは無縁なようなこのビデオは、現実に生じる抽象的な瞬間と向き合い、平凡な日常に隠れた美に光を当てながら、多様性、変化、交渉といった課題を露出させるものとなった。わたしはこのプロジェクトを振り返ることによって、田中の作品がもつ複数の人々による協働作業の側面を明らかにしてみたいと考えた。そこでアーティスト本人、モデル、撮影監督、そして中心となった美容師へのインタビューを通じ、作品の制作に力添えした多くの人々の声を記録し、集団行為の持つ深い意味合いを詳らかにしようと試みた。

フリオ・セサー・モラレス

形、ボリューム、重さ、動き

* 田中功起との対話

モラレス:カメラの前で行うパフォーマンスを、「セット・アップ・シチュエーション（設定された状況）」と呼んでいますが、それについて話してもらえますか？

田中:だれでも毎日決まってすることがありますよね。たとえば仕事にでかける前にコーヒーを飲むというように。これを「毎日のルーティーン」と呼ぶこともあります。僕たちは暮らしを営み、毎日ルーティーンをこなすことに囚われて、それを何度もくりかえすうちに、習慣から抜け出して何かをするということを忘れてします。おそらく自分がどのように振る舞っているのかを意識しなくなるのではないかでしょうか。このような「意識の惰性」のおかげで、僕らは楽に日々を暮らしていくようにも思えます。ひとつひとつの行為をいちいち意識していたら、前に進めなくなってしまいますから。だから、この「惰性」は悪いことではないかもしれない。むしろ、ある種の刺激を生み出すために、この惰性が必要になることもあるのではないかでしょうか。

「設定された状況」とは何かというと、日々くりかえす決まりきった行為を意識し、なおその意識的な状態を維持する手段のひとつです。参加してくれるひとたちのために特定の状況を設定して、その結果は成り行きに任せます。「設定された状況」は簡単な一文やいくつかのルール、指示書き（インストラクション）、方向性などから始まります。たとえば「五人の詩人が一緒にひとつの詩を書く」ことが決まっていて、あとのことばは参加者が決めてよい。作業を進めるうちに、当初の僕のアイデアからずれても差し支えありません。（そのルールに加えて）もうひとつ例をあげれば「ひとつの出来事を他者と共有することについての詩」というテーマがあり、これらのふたつの文が詩人たちに配されました。ほかのひとと作業を協働することによって、参加者は今までに自分が作りあげてきたものとは何であったのかということにも意識的になり、普段は意識しないことまで深く考えるよ

うになります。僕には、これが惰性になった日課の殻を破ることにつながるように思えるのです。

モラレス:《三人の美容師でひとりの髪を切る(最初の試み)》と《ひとりの髪を九人の美容師が切る(二度目の試み)》の違いはどこにあるのか教えてもらえますか?どちらも目的は同じでしょうか。なぜ同じプロジェクトを繰り返す必要があると思ったのか、教えてください。

田中:どちらも同じアイデアから出発しました。何人かの美容師がひとりのモデルの髪を同時に切る、ということですね。ところが繰り返してみると、違う結果になりました。プロジェクトはトロントとサンフランシスコという全く異なった街に影響されたし、実施された時期も、参加者の顔ぶれも異なります。それぞれの状況から異なる結果が生まれたわけですから、どちらの試みも似てはいるけれども、ふたつの間には微妙な差があります。タイトルに「試み」という言葉が入っているのは、作業の結果が、つまりここではビデオ作品ですが、発端となったアイデアの多様な可能性のうちの(それぞれが)ひとつの「見本」であることを暗に示しています。ふたつの「試み」によってふたつの可能性が明らかになり、どちらも(それぞれに)ユニークな「見本」なのです。そうした意味で、僕はちょっと変わった視点から、僕らの行為の多様な姿を描写したいと思ったわけです。

モラレス:キュレーターのドリュン・チョンに言わせると君の作品は「わたしたちの暮らす無数の「もの」に囲まれたこの世界と、それらの「もの」を巧妙で意外な、そして滑稽とも思える方法で用い、関連づけ、見直すことで生まれる可能性との関係(1)を探るものということになる。《ひとりの髪を九人の美容師が切る(二度目の試み)》がこのチョンの見方とどのように対応するか、話してもらえますか?

田中:アーティストは、批評家やキュレーターによる作品に対する解釈が、その作家活動を十分に表しているとは考えるべきではないと思います。こうした見解は作家の意図を越えて、作品にもうひとつの解釈を付け加えることにはなるとは思います。ドリュンのコメントには、僕(の関心)がなぜ「もの」から「ひと」へと移行したのかという問い合わせが読み取れます。僕はしばらくありふれた品物、「日用品」を用いた作品を手がけていましたが、たとえば《ひとりの髪を九人の美容師が切る(二度目の試み)》のような最近のプロジェクトでは、ひとがいて、かれらがある行為をする状況に注目するようになりました。日用品についても、茶碗は僕らが関係しないかぎり存在しない、とも言えるでしょう。茶碗は、それを知覚し使用する僕らとは切り離せない。僕らは茶碗を使い、茶碗は、その姿を僕らに知覚されることによって、どう使えばよいかを僕らに伝える。「もの」と「ひと」の間のこうした相互作用、あるいは関係性の融合は、「ひとからひとへ」の関係につながっていきます。実生活でも僕らはひとの集まり、たとえば友人、家族、同僚などのグループのなかでひとと接し、生きてゆかなくてはならない。僕らの暮らしはほかの人びとの働きによって支えられ、僕らも実際に込み入ったやり方で自分以外のひとを支え、そして積み重なる多様な関係性が維持されてゆく。日々のルーティーンにおいても、コミュニティや社会のなかで役割を果たす必要に迫られて、僕らは周囲

の人びと協働する。毎日、僕らはだれかと意思の疎通を図らなければならない。そういうことがあるから、注目する対象がものからひと、そして状況へ移っていったのだと思います。ドリュンのコメントにある「もの」を「状況」に置き換えれば、このことに通じますよね。

* モデル／タレントのニコール・コースとの対話

モラレス：田中功起の《ひとりの髪を九人の美容師が切る（二度目の試み）》でモデルを務めたのはあなたですね。美容師に髪を切ってもらっておもしろいと思ったこと、それからその理由を話してもらえますか？

コース：仕上がった髪型よりも、行為／パフォーマンス／経験のほうがずっとおもしろく感じました。わたしは客というよりモデルで、普通なら客は好みの髪型にしてもらおうとしていろいろ「指示する」つもりでその場に立ち会うけれども、今回はそういうわけではありませんでした。この作品では、髪につながっている人物（髪を切られる当人）に指図されることではなく、美容師同士の協力関係が重視されているわけですね。でもそれだけではなくて、少しは注文もつけるつもりでした（どんな髪型になっても、しばらくはその恰好でいようと思っていたからです）、これはわたし自身の作品のために考案し始めていたSF風の人物のようにしてもらうチャンスだとも思いました。当時はその人物像はまだ漠然とした思いつきにすぎなかつたけれど、いちおう「ファンキーな、未来的ニュースキャスター」というふうに美容師たちに説明しました。

モラレス：九人の美容師に髪を切ってもらうのはどんな体験でしたか？

コース：「髪を切って」もらっているというより、「髪型を創って」もらっているみたいでした。実際、自分は忘れられてしまった、もしくはわたしが客であるという観念が消滅してしまった、というような気が何度もしました。それから、髪を切り始める前に交わされた会話にはびっくりしました。美容師たちは鋭い質問を出し合いすぐさまこの難題にとりくみ、互いの技術の長所を確認し、分担を決めて、図入りの工程表まで描いたんです。そうやって髪を切ってもらったことは、わたしには物凄く大きな意味がありました。おかげで創作活動や協働作業でも仕上がる物より参加する人びとを重視できるようになりましたし、その方が作家がすべてを完璧にコントロールするやり方よりも解放感があつて好ましくわたしには思いました。

モラレス：田中功起の作品づくりには色々な側面があるけれど、なかでも予測不能な物事が持つ可能性を踏まえた側面が重要ですね。あなた自身も新進アーティストなわけですが、アートの作品づくりを批判的に見直すというような視点から、これまで誰も目を向けなかった日常生活の別の可能性についてどのように考えているのでしょうか。

コース：「予測不能性」というのは、「予測」を見込みと計算されたリスクとの問題」と捉えるわけで、

この「予測」は人間が生き抜くための理性的な思考過程の基礎にもなります。ただ、日々の暮らしのなかでも、それから作品をつくる過程でも、その枠組みから一歩踏み出して、「予測」の境界を試し、探究を試みることが大切ですね。田中功起の作品は自由行為者が一ヶ所に集められ、馴染みのない課題に直面するというシナリオなので、この「予測」(理性的な思考過程)とはまったく対照的といってよいでしょう。参加者はそれぞれに異なる専門技術や習慣の持ち主ですが、およそだれも想像もつかなかつたような状況に置かれることになります。普段アートと関わりをもたない人たちがこの種の思考／観察に携わるのは、とても興味深いことではないでしょうか。みながあやふやな気持ちになり、その時に互いの弱点と美点がはっきり見えてくるわけですからね。

*撮影監督ダニエル・ゴレルとの対話

モラレス:あなたにはアメリカの映像作家ジョージ・クッチャーやメキシコのヴィジュアル・アーティスト、ミゲル・カルデロンといった大作家の下で撮影監督を務め、編集を担当した経験がありますね。田中功起と仕事をしてどんな感想を抱いたか聞きたいのですが、この三人には感情に訴える力があり、癖のあるユーモア、詩情、社会批判を含んでいる、という共通点があるでしょう。そういうものをフィルムやビデオにうまく表現できたのは、何故でしょうか。

ゴレル:田中功起と仕事をするのは、とても新鮮でした。というのは、彼が自分のプロジェクトをハブニング、あるいはイベントとして捉えて、行為の起こる状況、粗筋までは用意するけれども、それがいったん動き始めれば、自然の成り行きにまかせるからでしょう。どういうことが起こるか、基本的なところは押されたけれども、実際の撮影の仕方については、完全に自由にさせてもらえた。そういったわけで、これまで撮ったどの短編よりも、スポーツ競技のドキュメンタリーに近い感じがします。

モラレス:《ひとりの髪を九人の美容師が切る（二度目の試み）》はどういう方針で撮ろうとしたのか、それから実際に撮影の現場で、また登場人物との関わりで、なにか手こずったことがあれば教えて下さい。技術的な面、あるいは表現の仕方で、特別な処理を用いたことはありますか？

ゴレル:スポーツとの類比をもう一步進めれば、田中は新種のサッカーを発案したようなものではないでしょうか。ボールが一個ではなくて九個あるわけです。そうやって田中がゲームの規則を混乱させるから、馴染みの深い、やり慣れたことがいきなり物珍しく、興味深いものに姿を変える。見る者、参加する者は戸惑い、ゲームに対する先入観があやふやになる。美容師はみな専門技術に習熟しているものの、だしぬけにまったく経験したことのない新しいやり方で仕事をするように求められる。自分がカットした後に、次の美容師がなにをするか判らないから、髪を切るという自分の仕事を学び直すか、少なくとも考え方を直す必要に迫られる。目標に到達するために、美容師たちはそれまでしたことのないやり方で、ほかの美容師たちと力を合わせて働くかなければならなくなるわけです。

* 美容師クリスティ・ハンセンとの対話

モラレス：理髪の基本を少し話してもらえますか。

ハンセン：カットにはいくつか種類があります。ワンレンジス、レイヤード・カット、それからグラデーション・カットですね。ワンレンジスのカットをする時には、とにかく髪全体を一点に向けて引き下げます。レイヤード・カットでは重みを取り除いていきます。髪とほぼ直角に、正方形を切りとつて。グラデーション・カットは重みを加えてゆきます。これにも頭の形に沿うラウンド・グラデーションと、1970年代に活躍したアイススケートの選手ドロシー・ハミルの髪型として有名な、ホタルの羽のようなスクエア・グラデーションの二種類があります。

モラレス：話を聞いていると、重みと動きが関係しているようですね。

ハンセン：形とボリュームです。髪を見ると、重みが形に見えます。想像するよりも論理的で、数学的と言ってもいいくらいです。

モラレス：田中功起のプロジェクトでは、だれが最初にカットをしたのでしょうか？

ハンセン：まず話し合いをして、手順を考え、どこから手をつけるか決めようということになりました。わたしが髪のカットのことを考えるときには、頭のあちこちを作業用に区分けされた部分と見なします。シンメトリーからちょっとだけ外れたカットでも、両脇はまったく違ったものになるし、それでいて同じひとつのものの異なる部分なのに変わりはない。頭を角の円い箱型に見立てるわけです。それを紙に書いて、さあ、これからどうしましょう、と考えます。グラデーションにするか、レイヤーにするか。重みを除くか、それとも積み上げてゆくか。ここではどんな手順を探るか。だれが何をするか。それから出来ばえを評価しないといけない。髪をカットして、何も考えずにそれをじっと見る必要があります。なにかしても、うまくいかないこともある。どんどん変化していくものです。

モラレス：理容やカットについて、もっと一般的な話を聞いてもよいでしょうか。髪をカットしてもらいにくるひとが、美容師に一時間だけの心理分析カウンセラーになってもらいたがるということは知っていますか？ そういう経験はあなたにもありますか？ どうしてそんなことが起こるのでしょうか。

ハンセン：時々あります。髪にはエネルギーが籠もっていると思うんです。端っこは死んでるわけだから、カットしてもらえばホッとするとし、気が晴れる事もある。

モラレス：髪にはエネルギーがあり、それが解き放たれることを髪を切ってもらうひとは心理的に感じて、美容師に心の裡を打ち明けようという気になるということでしょうか？

ハンセン：そんな面もあるかもしれません。ここは静かでしょう、それにとっても安全だし。

【註】

(1) 2010 年にイエルバ・ブエナ・センター・フォー・ジ・アーツで開催した田中功起個展「何も関係はないが、何かを関連づけることはできる」(“Nothing related but something could be associated”)の際に刊行した印刷物に掲載したドリュン・チョンのエッセイより引用。